

1. 昭和10年4月21日臺灣激震の東京本郷に於ける地震観測結果

昭和10年4月21日朝、臺灣西部に發した地震は、新竹、臺中兩州管下に強烈で、多大の損害を與へたが、東京本郷（東經139度46分、北緯36度42分）にては、長週期地震計を以て観測することが出来た。其結果を次に掲ぐ。

第 I 表 水平動南北成分

大森式地動計；重錘の質量42匁；倍率20；自己振動週期52.6秒；減衰比3.0

位 相	發 現 時	全 振 幅	週 期
P	時 分 秒 7 06 14.5	匁	秒
S	10 15.0		
L	14 48.7	0.775	26.3
M(max.)	15 50.5	0.925	12.1
F	9 11		

第 II 表 水平動東西成分

大森式地動計；重錘の質量17匁；倍率15；自己振動週期63.1秒；減衰比4.5

位 相	發 現 時	全 振 幅	週 期
P	時 分 秒 7 06 14.5	匁	秒
S	10 15.4		
L	11 46.1	0.500	27.0
M(max.)	15 52.4	0.915	12.2
F	9 11		

傳 播 速 度. 今回の地震に於て、最も震央に接近せる臺中測候所の観測によれば、發現時は午前7時2分38秒（初期微動繼續時間4.3秒）であるから、東京本郷に於けるP波の發現時7時6分14.5秒との差は4分10.7秒となる。而して臺中東京間の距離は1620杆なれば其の傳播速度は平均毎秒6.46杆となる。大森博士は明治39年4月14日嘉義激震の際に、臺中、東京に於ける観測の結果を比較されて、傳播速度として平均毎秒6.35杆を得られた（震災豫防調査會歐文紀要第1卷第2號参照）。